

# 子どもと高齢者の交流や助け合いをどう広げるか

(企画・協力：にっぽん子ども・子育て応援団)

## 提言

### 出番です！食・遊び場・居場所

まずは目の前の子どもや家庭の困りごとからつながろう！

## 登壇者

【進行役】	奥山 千鶴子氏	(特非) 子育てひろば全国連絡協議会理事長
	近藤 博子氏	「気まぐれ八百屋だんだん」店主・こども食堂主宰
	中村 俊一氏	(一社) プレーワーカーズ理事
	河原 廣子氏	(特非) かもママ理事長

### ■ 寄せられた声から

- 登壇者のみなさんそれぞれの目線から子ども一人ひとりのための支援に尽力され、その過程の中でとても自然な形で高齢者の出番につなげることができている様子がわかり、大変勉強になりました。
- 「子どもたちは高齢者との交流を求めているのか」という発言が印象的。事業ではさまざまな人と話すが、共に事業を進めるその人と自分の関わりの濃さによって、こちら側の「意見の受け止め方」に差があることに気づいた。多面的な視点を持ちながら企画していくことの大切さを学びました。
- 子ども支援、高齢者支援と縦割りの考え方から脱却できていなかったため、視点がすごく広がりわくわくもしました。本職に携わって日が浅いのでまだまだ勉強中ですが、100人の人より目の前の、というのを心に進んでいけそうです。

## 議事要旨 奥山 千鶴子氏

本分科会は、大阪大会からの継続したテーマである「子どもと高齢者の交流や助け合いをどう広げるか」に視点を置き、子どもが親だけでなく、地域の人たちに育まれて育つ環境が、高齢者や地域に及ぼす笑顔と活力につながり、これからの社会づくりに活かされる可能性を話題提供者から学び、それぞれが実践に活かしていくことを目指した。

近藤博子さんは、東京都大田区の「気まぐれ八百屋だんだん」の店主であり、全国に広がる「こども食堂」の産みの親のお一人である。歩行者天国ならぬ「子ども天国」はまちぐるみで子どもが主役になるところか懐かしく楽しい企画が満載。また、学生が地域のおとなを紹介する「おとな図鑑」など、親だけでなく多様な世代が子どもと関わり、子どもが主役となる仕掛けがある。だんだんは、点から線へ、線から面へと「食」「遊び」「居場所」でつながり、見守られる存在から見守る側へと素敵な循環に成長している。

中村俊一さんは、一般社団法人プレーワーカーズの理事。東日本大震災から1か月もたたない時期に東京から被災地に出かけたところ、子どもたちがおとなしくしており、現地の方々も子どもたちには気が回らない様子であったことから活動を開始。ボランティアに「何か作ってくれるの?」と言っていた子どもたちも、いっしょに野外の遊び場づくりを担い、次々にアイデアが実現していく。子どもたちの姿に周りの大人たちも触発されて、

手伝いのはずが「自分のため」に変わっていく。住民のミーティングが朝5時!など、郷に入っては郷に従えの方針が、地域になじむ秘訣であり、人つなぎ、場づくりのコツや知恵なんだと納得する。

河原廣子さんは、石川県加賀市で子育てひろば、ファミリーサポートセンター事業、地域食堂等を行うNPO法人かもママの理事長。最近では、地域まるごとお互いさまの支え合いの家「母屋わらわら〜っと」を開設。妊婦さんからシニアさんまでの居場所となっている。若くしてママになった方への就学支援、不登校だったお子さんの学習支援、シニアのセカンドライフ支援など、子育て支援から地域のあらゆる世代へと「ほんのちょっとのお手伝い」は、大きく成長しており地域に欠かせない存在感がある。

後半のディスカッションや参加者とのやり取りを踏まえて、当分科会の提言は、「出番です!食・遊び場・居場所 まずは目の前の子どもや家庭の困りごとからつながろう!」となった。子どもたちのあり様は、「社会の窓」。周りの大人が気づける感性をもっているか、子どもや子育て家庭の困りごとを察知できる感性と、社会の縦割りを前提として現場でつながること、支援に関わる人が主体的に取り組み、結果として自分も楽しめるような活動こそが、地域にレガシーとして残っていくのだらうと思われる。きっと参加者の心の灯に着火できた分科会となったのではなからうか。

### アンケートの結果 参加者概数：115名（オンライン：110名、会場：5名） 回答者数：19名

